

ニンマ派の教法

——『サムテンミクドゥン』に見えるゾクチェン教義を中心として——

平 松 敏 雄

一、『サムテンミクドゥン』に 叙述されたゾクチェン教義

ニンマ派の教法は九乗の宗義である。九乗の宗義の中で最も重要なのは、最高乗のゾクチェン・アティヨーガ乗である。中国禪のチベット仏教への影響に関連して、近年とみにその教義が研究者たちの間で注目されている。

筆者は既に他の論文で、十四世紀のゾクチェンの大成者であるロンチェン・ラブジャンパ Klong chen rab byams pa (1308~1363) の『七つの宝蔵』と、前期弘通

時の⁽³⁾敦煌文書の大瑜伽文献に見られるゾクチェン教義について論述した。本論文では⁽⁴⁾『サムテンミクドゥン』*bsam gtan mig sgron* (895) は *rNal 'byor mig gi bsam gtan*, 略号 SMG) に記されたゾクチェン教義について考察する。『サムテンミクドゥン』は前期弘通時のヌプ・チエン・サンギェーイェシエー *gNub chen Sans rgyas ye shes* の著した論書とされるが、十二、三世紀頃の「埋蔵書」*gter kha* とも言われる。もし、そうならば、⁽⁵⁾時期的には前期弘通時の敦煌文書と十四世紀の『七つの宝蔵』の中間に属し、その時期のゾクチェンを知るためには、恰好の資料である。

『サムテンシクドワン』は体系づけられた論書であり、諸乗の教法は「見」*lta ba*「修」*sgom pa*「行」*spyod pa*に分けて記述されている。分類のための分類と言えなくもなく、「見」「修」「行」各々がそれぞれに混在している。

ゾクチェンの「見」には九種、「修」には八種⁽⁶⁾、「行」には四種及び三種⁽⁷⁾が記されている。ここでは「見」のみをとり上げてみよう。

「見」の九種とは次のようなものである。

- a' 「境を」食むる⁽⁸⁾。「心」向ける⁽⁹⁾と離れる⁽¹⁰⁾の二見を *gza' gtad dang bral ba' ilta ba* ウルギン・ヤン・ラント *O rgyan Mahārāṣṭra* ムン・パリン・レイン *Vimalamitra* の御注(158b, 3~160b, 1)
- b' 自然成就と見⁽¹¹⁾ *lhun gyis grub par lta ba* ガラ・ド・ルン・ジ *dGa' rab rdo rje* の御注(SMG, 160b, 1~164b, 5)
- c' 大我と見⁽¹²⁾ *bdag nyid chen por lta ba* ヴァイローチャナ *Vairocana* の御注(SMG,

164b, 5~172b, 3)

t' 自生の智と見⁽¹³⁾ *rang byung gi ye shes su lta ba*

比丘尼・タン・カ・*dge slong ma Kun dga' ma* の御注(SMG, 172b, 3~174b, 4)

e' 作為・努力と離れる⁽¹⁴⁾と見⁽¹⁵⁾ *bya bsal dang bral bar lta ba*

フークタ *Bud kug ta* の御注(SMG, 174b, 4~178b, 5)

f' 大楽と見⁽¹⁶⁾ *bde ba chen por lta ba*

タン・ラント *Ku ku ra tsa* ムン・ラ・*Shrīṅgha* の御注(SMG, 178b, 5~180b, 5)

g' 不二と見⁽¹⁷⁾ *gnyis su med par lta ba*

シヤム・パリン・ヘー・*jam dpal bshes gnyen* の御注(SMG, 180b, 5~187a, 3)

h' 大滴と見⁽¹⁸⁾ *thig chen por lta ba* *de' dge*

独一なる大滴の自性⁽¹⁹⁾と見⁽²⁰⁾の方法 *thig le chen po cig gi rang bzhin du lta ba'i lugs*

ヤン・ド・ウ・ラ・*Sras thu bo rā tsa ha*

ta (あるいは「ダートウ・ウ・ラ・*sNgas thu bo ra tsa nyas sti*) の御注(SMG, 187a, 3~190a, 5)

i' 一切諸法を如実なる根基と見る⁽²¹⁾ *chos thams cad gzhi ji bzhin par lta ba*, *de' dge* 一切の辺が捨つられずに離れる⁽²²⁾と見⁽²³⁾の大方と見る⁽²⁴⁾ *mtha' ril ma spangs bral ba'i rang lugs chen por lta ba*

ガラ・ド・ルン・ジと王・*regal po 'Da' he na ta lo* の御注(SMG, 190a, 5~204a, 2)

これら九種の「見」のそれぞれについて説明をくわえてみよう。

a は「境を」食むる⁽⁸⁾。「心」向ける⁽⁹⁾の無⁽¹⁰⁾とが「真理」*don*「独」⁽¹¹⁾の自性⁽¹²⁾ *gcig gi rang bzhin*「我」*bdag* とある⁽¹³⁾と見⁽¹⁴⁾。「食むる⁽¹⁵⁾」と向ける⁽¹⁶⁾とは「縁」を説くものであり、南宗禪の無念に近い。なお「食むる⁽¹⁷⁾」⁽¹⁸⁾「向ける⁽¹⁹⁾」という用語は、『大藏經』所収の初期ゾクチェンの聖典にも見られ、前期弘通時からあったゾクチェン用語と思われる。

「向ける⁽⁹⁾」は中国禪にも見られ、『七つの宝蔵』にも受け継がれている。中国禪由来のものである。

b は「一切諸法が「自然成就の法性」(の)全き状態の自性」*lhun gyis grub pa'i chos nyid ngang chen po'i rang bzhin* とし正覚と見⁽²¹⁾と見⁽²²⁾とある。法性(あるいは法界)そのものが自然成就であると説く⁽²³⁾とともに、諸法が法界において法性として自然成就していると説く。ゾクチェンの九種の「見」の中で、最も重要なものである。

c は「一切諸法を大我と見るものである。大我とは「変えられず、こわされず、本来から自己の明知、不住の智の主として自らあらわされているもの」(*ma bgyur ma slad par ye nas rang rig pa mi gnas pa'i ye shes kyī bdag nyid du rang gsal ba*)と表現される(165a, 1~2)。「明知」「自生の智」である。仏教では原始仏教以来、縁起した諸法が縁起の理のままにあることが、法性であり真如であるという。そのような諸法に法性という真理がある。この諸法に法性の教義は一般的な物の在り方に関する教義であるが、仏教にはもう一つの真理が説かれる。

それは修習者個々人が真理(≡法性)を体現したものとすることであり、方法として、瑜伽(あるいは、禪定)が重要視される。とくに、唯心論では、所取能取の戯論と離れた心の状態、それを心の法性(≡心性)と呼び、更に、物の在り方としての法性そのものとする。このようにして他方では、縁起の理法からではなく、心の所現とすることによって諸法の存在を説明するようになる。⁽⁹⁾この唯心論的な視点によって、一切諸法は心性であり、心性に集まっております、心性は一切諸法に遍満しており、その根源であるとされる。

大我とは法性(あるいは、心性)に他ならないのであるが、その法性が自己に存在すること、他に求める必要のないことを強調するために、大我という用語が創られたと思われる。大我とは如来蔵思想⁽¹⁰⁾一般の用語であり、アトマンを意味する「我」とは異なる。また、一般の如来蔵思想と『サムテンミクドワン』の大我説の相違は、前者が客塵を否定するのに対して、後者は否定しないこと⁽¹¹⁾(169b, 4~5)である。この点も南宗禪に類似している。⁽¹²⁾「fは、一切諸法が始めから因縁(rgyu rkyen)と離れ

た「自生の智」の本性 ngob bo として成仏しており、虚空の光の如く大智 ye shes chen po として自らあらわされている rang bsal と説くものである。その説はcと大差ない。真理が因縁と離れている側面が強調されたのみと思われる。「自生の智」はゾクチェンでよく使われる用語である。

eは、一切諸法が本来から法性として「成仏し了っている」と見るものである。法性であることが完了している点が強調される。完了しているという意味(sin pa'i don)が二十説かれている。他乗の道・果が本来から為された了っていると悟り、自乗の修として、作為・努力と離れた方法が説かれる。煩惱・障蔽が否定されずにそのまま法性として肯定されることは、cと同じであり、ゾクチェン教義の特徴である。また、後代のゾクチェンの用語にみえる「完全解脱」(yongs gro)「自らのぼる」(rang shar)という表現が見られることにも注意したい。fは、業と煩惱と果である苦によってまとめられる諸法は、自性 rang bzhin が観察されるならば無く、置かれるならば何としてもそれらは生じないために、本性

ngo bo は本来無きことによって、菩提心大楽の清浄界 byang chub sens bde ba chen poi klong dag pa である、と説くものである。諸法の自性の考察から諸法≡法性の悟りに到るものであり、空性≡法性を継承するものである。大楽(≡明知)は自己に存在するものである点から、他に求める必要のないことも説かれる。

大楽の用語は密教的なものを思わせるが、その教義内容には必ずしも密教的でない。とくに、精神生理学を用いた男性原理・女性原理の双入による密教の究竟次第の大楽とは全く異なる。しかし、用語上のみからは密教の影響が皆無とも言われない。⁽¹²⁾

gは、真理が辺 mtha' というすべての「二」が無く絶対的の独一なるものであり、諸法はその独一なる真理に集まっているから諸法も不二・独一と見るものである。真理は「独一なる大我」bdag nyid chen po gcig「本来から住している菩提心」ye nas gnas pa'i byang chub sens「大楽」「努力と離れた真理」rtsol ba dang bral bai don と呼称されているからc・e・fと変らず、ただその不二・独一なる点が強調されたものである。

不二については五十九項目にわたって記されている。大きく分けて次の三種に分類できるように思われる。

1、「顕われ」snang ba と「空」stong pa が不二。
 (「顕われ」はマハーヨーガ mahayoga 乗の場合、唯世俗の位相にある神 lha が強調される。「空」とは「顕われ」に自性が無いことである。)

2、「果」等が本来から法界に成就している、あるいは、諸法が本来正覚しており、その点から悟・不悟、解脱・不解脱が不二であるとする。

3、真如(≡法界)そのものが、長・短、自・他という相対の二を離れて絶対であること。

1はゾクチェンの改変されているが、マハーヨーガ乗の不二を受け継いだものである。2は中国禅系のものである。ゾクチェン特有の「自然成就」や「自らのぼる」の用語を用いて発展させられている。3は真如に対する仏教一般のものであり、インド仏教・密教(マハーヨーガ乗)・中国禅を通じて変わりない。

また、「修」に関するものとして、思念せず縁じないことによって、上に降りる thog tu dbab pa ようにな

る、と記す(184b, 3~4)。「上に降りる」はゾクチェン特有の用語である。

h は、戯論 spros pa が一切諸法の自性 rang bzhin であるが、大滴(=自己の明知、菩提心)は一切の戯論と離れていると説く。他乗の悟りや十地・道は戯論に過ぎないが、戯論と離れた大滴の自性を悟る自乗の者は、「二」としての戯論 gnyis spros の一切諸法を捨てず、縁がないとする。真理の戯論と離れた側面が強調されたものである。大滴は「クンチェンギェル」*Kun byed rgyal po* (北京 No. 451, 略号 KB) にも記されている用語であり、ゾクチェン初期から見られるものである。

「修」に関して、縁がないこと、あるいは思念 bsam pa がどこにおいても動かならざることを「すなおに見ること」drang por las pa とおっしゃる、それによって大滴の境地を自ら得ると説く(187b, 3~4)。大滴という用語は密教的なものを思わせるが、「すなおに見る」という用語は頓悟を主張する中国禪を思わせる。

また、大滴が六滴を有する mJung le drug par ldan pa が記され(189b, 6~190a, 5)、心の法性を六側面から

とらえている。

i は、錯誤しない mna nor ba の側面を強調して説くものである。諸法の真实性 de kho na nyid は非人為であり、こわされないう mna bcos ma bsad pa によって、アティヨーガ・ゾクパチェンポであるからである。

このように説かれるが、実際は a~h の総括のような内容を持っている。それは相 mshan の異門 rnam grangs の記述によって知られる(190b, 1~191a, 1)。

そのような一切諸法の真实性を悟る方法として、「何ものも見ない」「見」が説かれる。見る者 lta ba po と見られる境 lta ba'i yul という相対する所取・能取(=戯論)が無いためである。その「見」の方法は次のように図式化される。

- 1、真理(=心性、菩提心、法性)は本来から A である。
- 2、本来から A であるものにおいては、A として見ることもない。
- 3、このような見方で見るのである。

A には a~h までの「見」の内容が入れられる。a~

h が分別されて対象化されるおそれがあるため、ゾクチェンの「見」が能見・所見のない「見」であることを重ねて説き直したのであろう。この方法によって「不錯誤の真理」ma nor ba'i don に住することができるとされる。

また、一切諸法は命名 bla dags に過ぎず、客塵的なもの glo bur ba であると説く。そして、「如実なる真実性」は十七の言説 tha snyad⁽¹⁵⁾、五十の言説等から解脱していると教える。その内容は a~h に説かれているものと大差ない。

最後に、「如実なる真実性」が「心の光輝く自性」sens kyi rang bzhin 'od gsal と表現されている mJung (203a, 6) にも注目したい。これは原始仏教から『般若経』、密教、中国禪に到るまで共通している三昧状態の「輝く心」と同系統のものである。

二、『サムテンミクツァン』(略号 SMG) と『七つの宝蔵』(略号 Dz・D) に叙述されたゾクチェン教法の比較

第一に、Dz・D に叙述されたゾクチェン一般の教義として、「ゾクチェンの四義 don bzh'i」と「真理の三側面」の教義(筆者命名)がある。

「ゾクチェンの四義」とは、「無なる mJung med pa⁽¹⁶⁾ 担々たる mJung phyal pa」「自然成就なる mJung lhun grub」「独一なる mJung gcig pu である。これらのうち「担々たる mJung」を除いた他の三つは、SMG の八種の「見」のいずれかと関連づけられるが、「担々たる mJung」は SMG にその用語が記されない。三昧状態の心あるいは諸法を表現したものであり、「修」とも関係あるように思えるが、SMG の「修」の記述にもそのような表現は見られない。

また、「真理の三側面」の教義とは、「本性が空」ngo bo stong pa「自性が自然成就」rang bzhin lhun grub、あるいは rang bzhin 'od gsal「慈悲が遍満」thugs rje kun khyab である。菩提心(=心性)の三種の「位相」を表わしたものである。SMG の「見」「修」「行」の叙述においてそれらに該当するものを探すことも可能であるが、「本性・自性・慈悲」という一セットの教義

のまとめ方はしていない。

これら「四義」と「三側面」はゾクチェン「心部」の聖典『クンチェーギェルポ』(略号KB)にすでに記されている(ただし、小異あり)ので、前期弘通時からあったゾクチェンの中心教義と思われる。これら二教義のみについては、KBからDz・Dへの影響の方が、SMGからDz・Dへの影響より深いと思われる。

このことは、SMGの記述方式の特異性のためとも考えられる。というのは、SMGは組織づけられた論書であり、各乗を一律に「見」「修」「行」という記述方式で叙述し、それによって各乗の比較を試みている。本来、各乗の優劣を比較するために記されたものと思われる。そのためゾクチェンの章では無理が生じている。ゾクチェンでは「見」「修」「行」が無いとも言われるからである。また、「見」「修」「行」を叙述する場合、教法内容にもよっているが、論者によって分類記述している趣きがある。これは頓門派、マハーヨーガの章に共通したSMGの記述の特徴であり、教法内容によって区別した論述形式を取るDz・Dとは差異がある。

このように、上述の二教義に関する限りは、SMGとDz・Dの関係は薄いが、『テプテルゲンポ』の系統の記述からすると、Dz・Dの著者のロンチェンパがSMGを一資料として用いたことは否定できない。そのことは、上述の二教義以外の両書の叙述に同一内容のものが多いことから裏づけられる⁽²²⁾。

第二に、SMGとDz・Dのゾクチェン教法を比較すると、SMGのゾクチェン教法はDz・Dの如くに三部に分けられていない。三部のいずれに属するとも記されていない。これはSMGの時代(推定十二、三世紀)には未だ三部の分類が出来ていなかったことを示すか、あるいは、SMGが三部の分類の形式範疇に入らない論書、例えば、三部共通の典拠となる論書であることを示すものと思われる。

第三に、SMGのゾクチェンがDz・Dで言われる三部のいずれに属するものであるのか、あるいは、いずれの部の教義に最も近いものであるのかが問題となる。「教誡部」は後述するような理由で除かれてもよいであろう。「心部」の教義の強調点とされる「自らのぼる」

る。

以上のことから、SMGのゾクチェン教法は少なくとも「心部」「界部」にまたがり属するものと言える。そのうちどちらの部に属するとは断定できない。本来、「心部」「界部」は後代に生起・究竟兩次第に学んで分類されたものであると観察され、形式的な面が多分に認められるからである。従って、この時期には「界部」が「心部」から独立していなかったというべきかもしれない。また、SMGの引用文献から見ると、「心部」の聖典が多い。

第四に、SMGのゾクチェン教法と「教誡部」の教法と比較してみると、「教誡部」で最も重要な精神生理学的教義(「トラーゲル」thod rgalの実践につながるもの)が全く欠けている。このことは、SMGの成立時には、まだ「教誡部」の精神生理学的教義が創られていなかったか、あるいは、SMGが「教誡部」に属する論書ではないことを示す。前者であるならば、「教誡部」の「部」としての成立はSMGの成立以後とということになる。

また、SMGのゾクチェン教法は、アビシェーカ、諸

の用語が、「界部」の教義の強調点である「自ら解脱する」(rang grol, あるいは、ただの「解脱する」)よりも頻出する点では「心部」的と言える。しかし、Dz・Dの「心部」の記述に見えている「心の方面」sens phyogsの語は一度も記されていない。

また、「裸」[「見る」]による「解脱」⁽²⁴⁾ gcer grol (146a, 1~2)「完全解脱」yongs grol (175a, 4)の語も記されていることから、全く「界部」的でないとは言えない。

SMGには法界縁起(=「心部」)も説かれているが、法界成就(=「界部」)も説かれている。

その他、「自己の明知」置かれず動かすことわされず入らず明々亮々であり、本来からあらわされているもの」(rang rig pa ma bshag ma g'yes ma bsilad ma zhugs par lhan ne lhang nge ye gsal ba, 30b, 4)が記されていることと、Dz・Dの「界部」の「真実性の究竟」[「界」] de kho na nyid kyī rab 'byams の「見られるままの諸法を凝視した明瞭さの中で全く散乱なく弛め放つ」yin thog ngos zin pa der cer re lhan ner yeng med chen por glod pa とする観法との関連を想わせるものがあ

法を神 *lha* と変える観想、基・道・果を説かず、実践上は全く密教的なものを含んでいない。このことも、SMG のゾクチェンが「心・界部」に属するものであることを裏づける。

第五に、SMG のゾクチェン教義には、Dz・D に記されている唯識教義による説明が全く無い。Dz・D の唯識教義の用語の一部は敦煌文献にも見られ、その影響は前期弘通時の「心・界部」からあったと思われる。しかし、それをまとめあげたのは Dz・D (あるいは、その「教誡部」) になってからであろう。また、Dz・D の八識説はインド唯識派の第七識が欠如しているという独特なものであり、『楞伽經』を経て取り入れられたものと思われる。SMG でこの唯識教義の影響によるものが全く説かれないことは、SMG のゾクチェンが唯識よりも唯心教義に基づくものであることを示す。それは SMG のゾクチェンが中国禪を基盤としていたことをうかがわせる⁽³⁰⁾。

第六に、Dz・D に記されている、法性を悟れば諸法は「涅槃の法」になり、悟らなければ「輪廻の法」になると

いう教義は、筆者の見た範囲では SMG においてゾクチェンの章には記されず、マハーヨーガの章に記されている⁽³¹⁾。この教義は敦煌文献においても中国禪(あるいは、ゾクチェンとも)と融合した密教マハーヨーガに見られる。

このことから、この教義のみは中国禪と融合した密教マハーヨーガから、後代大成期にゾクチェンの教義として Dz・D に取り入れられたと推定することも可能である。

第七に、SMG が「見」「修」「行」「温暖」と分けて説くことは、Dz・D では「心・界部」に見られない。「教誡部」の一部⁽³²⁾「見・修の温暖の程度によって障礙が除けられる」*lha sgom drod tshad kyi gegs bsal ba*「隠蔽と顕出の仕方」で説く *gab pa mngon du phyung ba'i tshul du bka' stsal ba* に「見」「修」「行」「温暖」が関説される。SMG の「温暖」に「動く」と *gyo ba*「得る」と *thob pa*「堅固なる」と *brtan ba* という三段階に分けられた記述 (SMG, 234b, 1) があるが、それが Dz・D にも見られることと合わせて、論述様式において SMG が Dz・D の「教誡部」の記述と関連があると言えなくもないが、その論述様式はその当

時一般の論述様式とも考えられる。また、『テプテルゲンポ』によれば、これらの「教誡部」の教義は前期弘通時からあったことになり、その点から SMG の記述様式との一致は不思議ではないのである。その部分の Dz・D の論述内容と SMG の記述内容との比較考察は今後の課題となる。

以上、SMG のゾクチェン教法は Dz・D の「心・界部」に属するものであり、「教誡部」・とくにその精神生理学的教義とは関係が薄いことを結論としていうことができる。

三、『サムテンミクナム』(SMG) に 叙述された頓門派、マハーヨーガ、 ゾクチェン教法の比較考察

まず、SMG に叙述されたところに従って三乗の差異・優劣点を考察しよう。

頓門派は「不生であり空である勝義」*don dam pa'i bden pa stong pa ma skyes pa* (SMG, 31b, 3) を悟りても、「不二」*gnyis med pa* を悟らなく、マハーヨーガ派は「不二の真如」*gnyis su med pa'i de bzhin nyid*

(SMG, 30a, 6) を悟るが、「自然成就」*lhun grub* を悟らない。ゾクチェン・アティヨーガ派のみが「自然成就の真如」*lhun rdzogs de bzhin nyid* (SMG, 30b, 2) あるいは「自然成就の法性」*lhun gyis rdzogs pa'i chos nyid* (SMG, 11b, 5~6) を悟る⁽³³⁾。

頓門派は一切諸法が本来から生じていない、空であるとのみ悟る。「空」は顯われ *snang ba* にはなれない。つまり世俗諸法の意味を認めないのである。衆生利益や神のマンダラ (SMG, 32a, 1~2) が等閑視される。いわゆる色身 *gzugs sku* の世界が否定されているのである。この頓門派に対する批判は、漸門派以来インド系仏教に共通する頓門派批判にもつながる。頓門派には般若・大悲のうち大悲が無いという批判である。

次に、マハーヨーガ派の優位点である「不二」について考えてみたい。マハーヨーガの「見」の「不二」と見なす *gnyis su med par lha ba* (SMG, 82b, 4~85b, 5, ニハン・ペルヤン *gNyen dPal dbyangs* の御注) に種々の不二が記されているが、基本的には世俗と勝義の不二にまとめられる⁽³⁴⁾。世俗には顯われ・有・多・生

等、勝義には空・無・一・不生等が属する。世俗は中観で言う唯世俗の方に強調点があるように思われる。頓門派の如く諸法が本来から生ぜず空であるのみとはいわず、顕われつつ空であり世俗・勝義不二の菩提心、あるいは二諦が無別なる真如 *bden pa gnyis dbyer med pa'i de bzhin nyid* (SMG, 11b, 5)³⁷ 事物と空が不二の真如 *ngos stong gnyis su med pa'i de bzhin nyid* (SMG, 83a, 4) を悟るのである。真如が不二と悟ることは、諸法をその真如であり不二であると悟ることにつながる。諸法が空・不生のみという空辺に墮さないのである。長尾雅人教授の説く二諦の簡別性とは異なる意味をもつ。マハーヨーガ派でこのように不二が主張されるのは、顕われの世界、色身の世界が空の世界と同じほど重要視されるためである。それは密教の生起次第の観想法（「諸神現出」）から必然的に導かれる主張であるが、既述した如くインド系仏教の般若・大悲の説とも結びつくものである。

第三に、ゾクチェン派の優位点である「自然成就」について考察しよう。一切諸法が「法界」あるいは「自生

なる清淨智の界」*rang byung gi ye shes nam par dag pa'i klong* (SMG, 30b, 2~3) において除けられること無く本来から自らあらわれており、自然成就していること *lhun gyis rdzogs pa* である。これはマハーヨーガ派の生起次第で、神の御身 *sku* 等を通じて出現させて利益をなし努力することに対する批判からの主張である（SMG, 249a, 4~5）。また「果が「法界」において自然成就しているのに、それを多くの方便 *thabs* によって努力して求めることに對する批判も含まれる。マハーヨーガが性起・法界縁起であるのに対して、ゾクチェンは法界成就を説く。マハーヨーガが色身の「位相」における教義であるのに対して、ゾクチェンは法身の「位相」における教義である。ゾクチェンで説かれる「のぼる」*shar* と「解脱する」*bröl* の二側面の教義に関して言えば、マハーヨーガは「のぼる」、ゾクチェンは「解脱する」にその強調点がある。かつて、筆者がゾクチェン教義の基調は「解脱する」の側面にあると言ったことが、SMG のこの記述から裏づけられる。

さて、三乗の差異点（優劣点）は以上の如くであるが、

頓門派とマハーヨーガのゾクチェンへの影響部分あるいは共通点を次に考察してみたい。

まず、頓門派について。実践に関しては頓悟・無努力・無分別を標榜する頓門派がゾクチェンに影響を与えたことは否定できない。教義に関しては、SMG の頓門派の「見」の結語の部分 (SMG, 72a, 4~b, 1) に記されているものは、そのままゾクチェン教義となる。また、用語では「*すなおに* *drang por* 見、修し、行する」(SMG, 62a, 3~4)「*すなおに思念する*」*drang por bsam* (SMG, 64b, 4)「是」*yin pa*「非」*ma yin pa* (SMG, 65a, 6)「状態」*ngang* (SMG, 74a, 3~4, 75b, 1~2)「自己の明知」*rang rig pa* (あるいは「自証知」)等がゾクチェンと共通である。その関係の深さを思わせる。

次に、マハーヨーガに関して。SMG のマハーヨーガはインド密教生起次第と異なる要素が含まれているので、問題が複雑になるが、まず、その「見」を考察しよう。「見」の別説に四種が記されている。

- 1、方便と般若が二として無くと見ゆめ *thabs dang shes rab gnyis su med par lta ba*

サンギェーサンロ *Sangs rgyas gsang ba* の御主張 (SMG, 99b, 3~100b, 6)

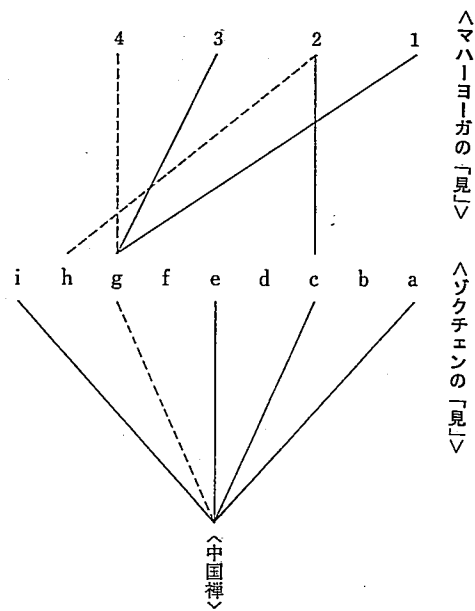
- 2、大我と見るゆめ *bdag nyid chen por lta ba ka lo*・*ペルンヘン* *sKa ba dPal brtsegs* の御主張 (SMG, 100b, 6~102b, 4)

- 3、不二と見るゆめ *gnyis su med par lta ba ni hñ*・*ペルヤン* *gNyen dPal dbyangs* の御主張 (SMG, 102b, 4~105b, 5)

- 4、平等性に見るゆめ *myams pa nyid du lta ba*・*ペルマドトマーン* ⁽³⁸⁾ *Padma dang Ma dus du* の御主張 (SMG, 105b, 5~108a, 4)

それぞれの内容を説明することは省略するが、内容の差異はともかく、それらの呼称の上からゾクチェンの「見」と比較すると、次頁の図のようになる。

この比較から、ゾクチェンの教義には *a* や *e* の如く明らかに中国禪から影響されたものも存在するが、*c* や *g* の如くにマハーヨーガと共通のものも含まれる。このことについては、SMG のマハーヨーガがゾクチェンの逆影響を受けて成立したものであるためか、あるいは、*c*



(実線は点線よりも両者の関係が深いことを示す。また、d, f, hも内容的には中国禅と共通のものを含む。マハーヨーガに關しても、教義内容から言う、a-iのより多くのものと結合されよう。)

の大我⁽⁴⁾の教義は如来蔵思想一般に共通であって、マハーヨーガもゾクチェンもともに如来蔵思想を基盤とするので、共通の大我思想を含んでいると考えることも可能である。しかし、SMG による限り、ゾクチェンの成立にマハーヨーガが教義において部分的な影響があったと考

えることも可能である。この可能性は、マハーヨーガの「見」にある「大我」の項に、「大滴」の語が数箇所記されていることから強められる。そのうちの二箇所 (SMG, 102a, 1と2) は、『ギニョナル・ラヤ』sGyu phrul bla ma からの引用であり、「大滴」の用語はマハーヨーガ幻化網からゾクチェンに取り入れられたとも考えられる。

SMG のマハーヨーガの「修」に關しては、「漸次のもの」rim gyis pa と「頓時のもの」cig car pa が記されている。前者は密教生起次第、後者は中国禅やゾクチェンと共通のものである。このことは SMG のマハーヨーガが中国禅(あるいはゾクチェンとも)と融合したマハーヨーガであることを示す。

インド成立の本来のマハーヨーガ幻化網 sgyu phul tra ba は、教義面ではともかく、実践面ではゾクチェンに全く影響を与えなかったと考える方がよいようである。

四、結 語

SMG は現在のニンマ派の最高権威者ドゥージョムリンポチェ bDud 'joms Rin po che が重要な四種⁽⁴²⁾の論書として挙げているうちの一つである。SMG によれば、上述の如く、ゾクチェンは実践面では全く中国禅的であるが、その教義面の成立に、中国禅とともにマハーヨーガの影響を推測することが可能である。とくに「不二」の教義に關してである。

しかし、SMG は、その著者の中国禅・マハーヨーガ・ゾクチェンの教法に対する理解の仕方によって書かれたものである。SMG の著者のそれぞれの教法に対する取捨選択があろうし、流派による偏りもあろう。時期的な制約(推定十二、三世紀)もあろう。その点に注意する必要がある。

例えば、意味の差異はともかく、「不二」の用語は中国禅にもあり、既述した如くゾクチェンの「不二」にはマハーヨーガからの継承のみとは言えない「不二」もある。また、マハーヨーガの中心聖典『サンワニンポ』*sSang ba snying po* や敦煌文書のマハーヨーガ文献 VP. NO. 454 に於「自然成就」lhun grub, or lhun

rdzogs が記されている。それらの用語がゾクチェンのものと内容が同じなのか異なるのか、あるいは、ゾクチェンの教義に影響されたものは、今後の研究課題となる⁽⁴⁶⁾。

中国禅・マハーヨーガ・ゾクチェンは教義面において既述の如き差異はあるものの、菩提心の観法を媒介として、極めて接近している⁽⁴⁷⁾。そのため、VP. NO. 454 や SMG 等のマハーヨーガのように中国禅と融合したマハーヨーガも見られるのである。チベットでゾクチェン教法を創ったと推測されるヴァイローチャナやヴィマラミトラが本来タントリストであったことと考え合わせても、実践面ではなく教義面でゾクチェンの成立にマハーヨーガが影響を与えたと推定することも可能である。

註

(1) 九乗の宗義については、拙著『西藏仏教宗義研究第三卷』東洋文庫、1982 (以下略号『西藏宗義3』) pp. 8, 131~132。

(2) 『西藏宗義3』

(3) 『講座敦煌』「敦煌のタントラ經典」大東出版社、未刊

- (4) gNub chen Sangs reyas ye shes: bSam gtan mig
sgron (or, rNal 'byor mig gi bcan gtan), pub. by
S.W. Tashi gang pa, Ladakh, 1974.
- (5) 'ベクチン」の「珍」にふつ「SMG」では 204a, 2~
224b, 2 に記されていないが、別説にふつ八種類が記され
ていないので 208b, 3~212b, 1 にあろう。
- (6) 「行」に關ふ「SMG」では 224b, 2~234a, 4 に記さ
れていないが、「行の四種」が記されていないのは 224b, 5
~230a, 3 にあろう。
- (7) 「行」のまゝの (yongs spyi) にふつ三種が記されて
いるのは 231a, 2~233b, 3 (結語を合する 234a, 4 未
だ) にあろう。
- (8) 例えば「食(やむ)」の用語は「KB, 105-4-8, 105
-5-8, 106-1-2 (以上第二十一章)」、110-4-2, 123-1-4 に
記される。
- (9) 心所現と縁起は唯識教義におつて初めて結び合はせら
れよう。
- (10) 如来藏思想の四句と四徳(大我が含まれる)に關して
は、高崎直道「如来藏思想の形成」春秋社、昭和四十九
(以下略号「形成」) pp. 766~767 参照。
- (11) 「大我」を悟ることをいふ「五つの大いなること」
che ba lnga を有するものにならぬ。「五つの大いなるこ
と」にふつは SMG, 170b, 3~172a, 1.

- (12) 「大衆」という語は前期弘通時から使ったもの、K Bには頻出する。
- (13) 例えば、KB, 95-1-7。
- (14) 大藏より、1. dbyings kyī thig le. 2. dbyings rnam dag pa'i thig le. 3. chos nyid kyī thig le. 4. yeshe chen po'i thig le. 5. kun tu bzang po'i thig le. 6. lhun gyis grub pa'i thig le.
- (15) SMG, 196b, 4~197a, 4.
- (16) 以下の三語のみ強調したものは、SMG, 197a, 6 ~198a, 6, 以下の三語のみ強調したものは、SMG, 198a, 6~b, 5.
- (17) 『西藏宗義』 pp. 15~17.
- (18) phyal pa の訳語として「持てる人」の方が適当かもしれない。
- (19) 『西藏宗義』 pp. 44~45, 55, 115.
- (20) 『西藏宗義』 p. 44.
- (21) *Gos lo tsāñ ba gzhon nu dpal : *Deb ther sngon po*, 1476~1478, Sata-pitaka Series, vol. 212, Ed. by L. Chandra, New Delhi, 1974 (註ゆ DTN) より SM G にて下に類似語。DTN, Ga, 17a, 5 より Yontan gzung (1126~1195) の後半 Zhig po bdud rtai (1149~1159) を含む論書の一からなる。この二語を信ずる、SMG は十三世紀には成立したことになる。他の箇所は DTN Ga, 44b, 4 より klong chen

- pa (1308~1365) の師 Kumārataja (1266~1343) がその師の slab dpon sgom pa などの金書を授けしめらしたと記す。
- (22) 用語上からみて「名称のみなる」 ming yang med (SMG, G, 179b, 5)「底は埋ひぬれぬ」 dong sprugs (SMG, 180a, 2)「是より非」 yin min (SMG, 163b, 5, 182b, 3)等、共通のものが多く。
- (23) 『西蔵宗義』 pp. 18~20.
- (24) *gcet gro! ts Dz.D* の *cer gro! ts* 語か。もしやうだとすれば *cer gro!* はかつて筆者が訳したように「凝視による解脱」とはななく「裸」に見ることにする。解脱であるいは「隠れなくあるがために」[見ることにする]解脱となる。 *cer* は *cer re* とはななく *gcet bu* のようになる。『西蔵宗義』 pp. 23, 59, p. 94, VI—註83参照。
- (25) 『西蔵宗義』 pp. 24~25.
- (26) 『西蔵宗義』 pp. 43~44, 57~58, 60~72.
- (27) 『西蔵宗義』 p. 47, pp. 90~91, VI—註25。
- (28) 『西蔵宗義 3』 p. 50. 高崎直道『楞伽經』(仏典講座 17) 大蔵出版、昭和五十五(以下略号「高崎楞伽」) pp. 104, 139~140.
- (29) 中国禅宗の所依となる『楞伽經』でさえ、唯識教義を説くものが、唯心教義の方が強いと言われる。
- (30) SMG で唯識教義が説かれる重要箇所は、マハーヨー

- が乗る「良」の「平等性」を見るべし」(SMG, 105b, 5~108a, 4) には述べた「意識が五蘊の平等なること」
 raam shes bregyas ye shes lngar mynam pa, SMG,
 107a, 6~108a, 4) に対応する。その対応として「意識が」
 ' zhiḡ don gyi kun gzhi (→de bzhiḡ nyid kyī
 ye shes)
 1) sbyor ba don gyi kun gzhi nram par shes pa
 (→me long lta bu ['i ye shes])
 2) yid kyī nram par shes pa (→so sor rtog pa'i
 ye shes)
 3) nyon mongs can gyi yid (→mnyam pa nyid
 ['kyi ye shes])
 4) sgo lnga yul tha dad la dnigs pa (→bya ba
 grub pa'i ye shes)
 と記されるが、一と二は大成期のゾクチェンの Dz-D
 で説かれる「四種のクンシー」に同名のものがある(『西
 蔵宗義』 pp. 90~91. VI—註25参照)。
 また、唯識論者への転依説批判の箇所でなされた
 Dz-D に叙述されたものとは異なる。「クンシー」を全
 く妄とするのではなく、そのまま真と悟るのである。如
 來藏思想の転依説を押し進めて、如來藏思想本来の方向
 へ戻ったものとも言える。あるいは、熏習の種子や我執
 等を除かずに清浄と悟ることは、中国禪の方向へ進んだ

ものとも言える。北宗禅ではなく南宗禅の方向である。なお、このSMGの記述から、ソクチェンへの唯識説の導入が、マハーヨーガ（あるいは、中国禅と融合したマハーヨーガ）を通じてなされたと結論するのは、早計に過ぎる。もう少し慎重な考察が必要である。

Dz.D.の唯識派に対する転依説批判については、『西藏宗義』p. 48。如来蔵思想の転依説については、『形成』p. 758『高僧榜伽』pp. 169, 206。『仏典解題事典』春秋社、第二版、1977, pp. 144~145 参照。

(13) Padma 'byung gnas の「毘」については、『SMG, 97a, 4~b, 3』。ただし「輪廻の法」という用語は記されていなく。それから「語」としては、『西藏宗義』pp. 27~28。

(32) 『西藏宗義』p. 37。

(33) 『西藏宗義』pp. 40~41。

(34) 『西藏宗義』pp. 41~42。

(35) 『西藏宗義』p. 88, VI—註 4, 7, 10. p. 99, VII—註 1。

(36) 他に「輪廻と涅槃の不二が説かれる (SMG, 103b, 3~5)。これは世俗の「位相」における世俗と唯世俗の不二を意味するものと思われる。

(37) 長尾雅人『中観と唯識』岩波書店 1978。

(38) 『西藏宗義』pp. 27~33。

(39) 『西藏宗義』p. 33。

(40) あるいは、パドマ・タンマトゥータウと一人の名前として読むべきかもしれない。

(41) この大我の教義は、所依とした『楞伽經』等から当然、中国禅にも含まれる筈である。

(42) SMG の Preface に「*mdo'i 'grel chen mfun pa'i go cha*」
「*dkai' gcod mfun ba'i mston cha*」
「*sGyu 'phrul bryad cu pa'i mngon rtogs 'grel*」
「*rDzogs chen gi man ngag bsdun glan mig sgron*」
(=SMG)

(43) SMG, 76b, 6~79b, 2, *Li tsa byi di ma med par grags pa'i mdo* の公用部分。及び Pelliott, No. 116 参照。

(44) 例として *gSung ba snying po* (北京 No. 455) の 6-1-7. 第十三章 6-1-6~6-3-5 に類出する。また、『西藏宗義』p. 38. 参照。

(45) 『西藏宗義』p. 37

(46) 資料的にチベット仏教は確かめられていないが、洪州禅での「自然成就」に類似した教義があるように思われる。『西藏宗義』p. 35。

(47) 『西藏宗義』pp. 36~38. 「敦煌タン」参照。

(パドマ・タン・東京大学大学院博士課程)